

## 第十九話

### 藤代川軍事国番中矢給事

『前太平記』上 卷第三 五十六頁から五十九頁より

#### [藤代川の合戦]

夜が明けると十三日に、両軍の兵たちは、藤代川を挟んだ東西の岸に臨み、鬨の声を上げ、まず矢合わせ (巻) の鏑矢を打たせた。本当に敵の大軍に味方の軍を比べると、「大海の一滴」、「九牛の一毛」（と言えるほど少なく）、匹敵することは

対揚すべきに非ざれ共、

出来ないが、皆道理を千鈞 (武) になぞらえて（→非常に重く考えて）、命を一つの

皆義を千鈞に比し

命を一羽に

羽と同類とした（→非常に軽いと考えて）兵たちであるので、少しも気後れせず、

類せし兵共なれば、

卯の刻の半ばから戦が始まって、入れ代わり立ち代わり戦った。まず一番には、将門の右將軍大葦原四郎将平が、五百騎余りで下流を渡って、どっと喚いて駆け出すと、村岡五郎良文が三百騎余りで渡り合い、しばらく戦って退陣する。二番に御厨三郎が、八百騎余りで上流を渡って、前回の恥辱を返上しようと、まっしぐらに切

ってかかる。平太夫惟幹は寄せ合わせてこれをふせぐ。勝利はないまま退陣すると、平三兼任は交代して戦う。将頼の軍勢は二百騎討たれて引き返すと、味方も七十騎余り討たれた。その後両軍は入り乱れ、申の剋の終わりまで、三十回余りの戦いに人馬は共に疲れたので、戦は明日と約束して、双方退陣したのだった。その夜は互いに遠篝<sup>(参)</sup>をたいて、夜が明けるのを遅いと待機していた。

#### [合戦の雌雄決せず]

月は西に傾き、鶏が三度鳴いて、五更<sup>(肆)</sup>がまだ明けていないところに、馬の足

玉兎西に傾き、

を早め、両軍は互いに寄せ合わせ、追っては返しては、囲んで囲まれて、火花の散

火出づる程こそ

るほどに戦った。もともと生死を知らぬ荒々しい田舎武者であるので、親が殺され

戦ふたれ。

でも子供はこれを助けず、乗り越えては敵と戦い、主君がけがをしても郎従はこれを助けず、その馬に乗って駆け出す。そのため怪我人も死人も、幾千万という数を

されば手負い死を致す者、 幾千万と云ふ数を知らず

超え、流れる血はぽたぽたと滴り、藤代川の白波も、朱色に染まって流れた情景

流るゝ血は漉々として、 藤代川の白浪も、 朱に染みて流れしは

は、黄帝が蚩尤と戦った、「紅波が楯を流した」<sup>(伍)</sup>という故事も、これには及ば

黄帝蚩尤と戦ひし、 紅波楯を流せしも、

ないと見えてしまった。しかし将門の兵たちは、毎回多く討たれたので、権守興世

是には過ぎじと見へにける。

が真っ先に駆け出し、「無縁の人々に先陣を切らせるから、毎回味方の勝利がない

「よしなき人々に先を駆けさすればこそ、 毎度味方の利なきのみか、

だけか、新参の若者をこのように多く討たせているのだらう。さあ一戦して皆さん

あつたらしき若者を斯様に多く討たすため。 いで一軍して旁の

の手本にさせよう」と言うままに、部下たちを選びすぐって三百騎余りを斜めに進

手本にせさせん」 手勢選つて三百余騎雁行に進ませて、

ませて、夏海庄司が三百騎余りでとどまっている（軍勢の）、真ん中に駆け込ん

夏海庄司が三百余騎にて扣へたる、 真ん中に駆け入りて、

で、わき目もふらず戦った。はじめのはつたりとに恥じていたのだらうか、また戦の

面も振らず戦ひたり。 誠に始めの広言にや耻ぢたりけん、 又軍の

手段がよかったのだらうか、夏海の軍勢は多く討たれ、馬に鞭を打って退散する。

手段や善かりけん、 夏海が軍勢若干討たれ、 捨て鞭打つて引き退く。

平次繁盛はこの有様を御覧になって、竹の一つの塊に繁っているのを小楯<sup>(陸)</sup>にし

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

平次繁盛此躰を見給ひて

竹の一叢滋りたるを小楯に取つて、

て、多くの矢を一斉につがえて散々に射させ、敵の楯の端が揺るぐところを、「し

指し取り引き詰め散々に射させ、

敵の楯の端ゆるぐ処を、

めた上手くいったぞ」と、一斉に刀を抜いて打ってかかる。興世の軍勢はたまりか

「得たりや賢し」と、

抜き連れて打つて懸かる。

興世が軍勢たまりかね、

ね、また本陣へと引き返す。こうしては勝者はいつ決すだろうかとも分からなかつ

亦本陣へ引き返す。

斯くては勝負何有るべしとも見へざりしに、

たが、将門が二万騎余りを一箇所に集め、積極的に攻撃を仕掛け進ませた。国香の

将門二万余騎を一所に集め、

陽に開いて進ませたり。

軍勢は一つにまとまってこれに立ち向かう。ああ今こそ両家の存亡はこの一戦にあ

国香の軍勢、陰に閉ぢて之に向かふ。

あはや今こそ、両家の存亡此一挙に在り。

る。首を取り名を上げ、家の誉れに位置付けようと、勇み進んで戦った。

分捕り高名し、

家の眉目に備へんと、

勇み進んで戦ひたり。

### 【将門国香を射る】

将門はその日の出で立ちには、紺地の錦の鎧直垂 (漆) に、赤糸絨 (捌) の鎧で、裾は金物が多くほどこしているものを、草摺長 (玖) に着下し、黄金作りの太刀に、熊の皮の尻鞆 (拾) をかけ、鷹の羽を竹につけて作られた征矢を、箬高 (拾壹) に背負い、村重籐 (拾貳) の弓の真ん中を握り、「求黒」と言つて五尺三寸あった、陸奥生まれの暴れ馬に、白覆輪 (拾參) の鞍を置かせて乗っていた。軍陣の先頭に駆け出し、矢

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

の的は少なく馬を立たせ、鎧を踏ん張り弓杖をついて大声で申し上げたことは、  
「私は（自分が）天皇の位の血統（であることを）心にとめて忘れず、自ら斧鉞を

「我十善の皇統を心に懸け、 自ら斧鉞を

取って天下を征伐するために今出発させる所で、この道を邪魔する者は誰であろう

執つて万国を征罰せんが為に、唯今進発せしむるの処に、 此道路を遮る者は誰そや。

か。常陸の大掾国香と見えた。どうして同胞の交わりを忘れ、この戦いに至られる

常陸大掾国香と見へたり。 何ぞ叔姪の昵を忘れ、 鬪諍に及ばるゝの条何事ぞや。

事情何事だ。このことであるように見える。『石を抱きて淵に入る』の喩え、『飛

是なめり、 石を抱いて淵に入るの譬へ、

蛾身を忘れて火に入る』ということに似ている（→つまり自殺行為）。それかある

飛蛾身を忘れて火に入るに似たり。 其か有らぬか、

いは、矢の一つでも受けて知りなさい」と言って、五人張(拾肆)に十五束を三伏(拾伍)

矢一つ受けて知り給へ」

分にしたことを忘れるほど引き絞って、弦音を高々と切って放つ。この時に笠間の

荘園の下司(拾陸)の行国は、大将と馬を並べてお側にいたが、この様子を見て、ああ

大変だと思い、先んじて国香の矢面に走り立ちふさがっていたが、将門の射た矢

は、遙かに二町余りを越えて、行国の鎧の胸板をブスッと射貫いて、大将の国香の

右の胸元の下に沓卷(拾漆)が刺さって立っていた。深手でいらっしやるので、馬か

らまっさかさまにお落ちになる。多くの兵たちはこれに気力を失い、陣中は騒ぎ合っていた。将門の兵がこれを見て、「さあ敵は負けが見えるぞ」と、楯を叩き箆を

将門が兵是を見て、 「すは敵は色めくぞ」と、 楯を敲きゑびらを

鳴らし、どつと喚いて打ってかかった。平太夫惟幹は二百騎で引き返し向かい、大

鳴らし、 どつと喚いて懸かりけり。

勢の中へさっとかけ入り、縦横無尽に駆けまわり、引き返しては追い払い、七八度まで引き返し攻められたところで、「長追いするな」と言って、そこまで遠くは追わなかった。もしこの時どこまでも追いかけたならば、一人も残らず誅殺するはずだったが、行国が矢面で死んだため、大将がお怪我をなさったのを知らないでいたのだろうか、始めの戦に恐れをなして、また伏兵が今もいるだろうかと思って、そこまで長追いをしなかった

---

## 注釈

※壺・矢合わせ……開戦の合図として両軍が互いに矢を射交わすこと。

※貳・千鈞……「鈞」は目方の単位。非常に重いことの例え。

※参・遠篝……陣所から遠く隔たった所で焚く篝火。

※肆・五更……時刻。現在の午前四時頃。

※伍・「紅波が楯を流した」……謡曲『頼政』に「血はタク鹿の川となって、紅波楯を流し、白刃骨を砕く」（血は、タク鹿の古戦場のように流れて流れ、紅の血の波は楯を流し、白い刃は骨を打ち砕く）という表現が

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵／<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

ある。「タク鹿」は中国古代の伝承に登場する古戦場で、黄帝と蚩尤が戦ったとされる。（参考文献：『新編日本古典文学全集 58 謡曲集』1 小学館 1997 年

※陸・小楯……楯の代わりに身を寄せる立ち木。

※漆・鎧直垂……直垂の一つで、鎧の下に着る。

※捌・赤糸絨……「糸絨」は組糸による甲冑の絨。赤糸絨は以下の画像を参照。



(笹間良彦監修・棟方武城執筆『すぐわかる日本の甲冑・武具』東京美術 2004 年 6 頁より引用し加工)

※玖・草摺長……「草摺」は鎧の胴の裾に垂らして腰から下を覆う部分。「草摺長」は草摺を長くして着ること。「草摺」は上画像を参照。

※拾・尻鞆……鞆を保護するために覆う毛皮の袋。

※拾壺・筈高……矢を箆に入れて負う時に、矢筈が高く見えるようにすること。

※拾式・村重籐……「重籐」は下地を黒漆塗りにし、その上に籐を幾重にも巻いた弓。「村重籐」は、重籐弓に斑を巻いたもの。

※拾参・白覆輪……縁取りを銀メッキにしたもの。

※拾肆・五人張……四人で弓を曲げ、一人が弦をかけるほどの強弓。

※拾伍・三伏……「伏」は矢の長さを図る単位。

※拾陸・下司……荘園の事務に従事した下役人。

※拾漆・沓巻……矢の鏃を差し込んで糸を巻き付けた部分。

---

将門パート…一年ぶりの更新…………… (申し訳ありません)

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトの URL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m( )m

公開：2017/2/27

改訂：2021/3  
海熊童子